植物余話

一度見る価値ある「ナンジャモンジャノキ」……廣田伸七

五月晴れに鯉幟が泳ぐころ関東では新緑の美しい時期となる。このころ，樹全体に雪が積もったように白一色で飾られる珍しい樹がある。これを人呼んで「ナンジャモンジャノキ」と言う。今回はこれを紹介する。「ナンジャモンジャノキ」というのは別名で，正式和名は「もくせい科のヒトツバタゴ」のことである。長野県の木曽地方を流れる木曽川流域と長崎県の対島に自生する雌雄異株の落葉高木である。幹の直径は60㎝、高さは10mにも達する高木で，葉は長い柄のある楕円形で対生し，成葉は普通全縁で裏面に褐色の毛がある。5～6月に枝の先に円錐状の集散花序を多数つける。花は白色で深く4裂する。満開時には樹全体が雪に覆われたように白一色になり，実に見事で，初めて見た人はその美しさに圧倒され，まさに「これはなんじゃもんじゃ?!」と叫びたいほどである。

この「ナンジャモンジャノキ」の名前は，他の木でもしばしば使われている。例えば房総の館山市内の三島神社には「ナンジャモンジャノキ」と呼ばれている樹がある。この木は，樹皮がささくれだって，ちょうど杉や檜の幹のようで，葉は広葉樹なので「これはなんじゃ？」ということから，この地方ではこの樹を「ナンジャモンジャノキ」と呼んでいる。しかし，この樹の正体は「かばのき科のアサダ」で，ヒトツバタゴとは全く違うものである。この他にも房総では，今まで見たことがない樹で珍しいものを「ナンジャモンジャノキ」と呼んだという。そして，この樹の正体はヤマボウシ，クスノキ，バクチノキ，マテバシイなどであっと川名興氏の『千葉県の植物方言』に記してある。

▲ナンジャモンジャノキの花期

別名でナンジャモンジャノキ，正式和名ヒトツバタゴの花の満開時の景観は実に見事である。樹全体が白一色に覆われ，桜のソメイヨシノの満開とはまた異なった趣があり，これを初めて見た人はまさに“これはなんじゃ？”と思い「ナンジャモンジャ」と呼びたくなる。ときたま植物園などに植えてあるので興味のある方は訪れて見ては如何ですか。

▲枝全体が雪に覆われたようになる

▲花冠は5裂する